

## 「行動の河」

—最後の「行動」となる自決の意義、武士道という思想—

◎ **自決の本当の意味** 55年に亘って考え続けたこと。

「神話と現世が、もう一度、一体とならなければならない」

→ 日本人には、新しい神話が必要なのだ。

最終文学によって新しい神話を創るに至る四つの道があった。

行動の河の中の道

1. **反文学への挑戦** 文学が生活に墮している

日本人に対する文学の意味を問うていた

真の愛国心への道

『鏡子の家』『美しい星』『英霊の聲』『豊饒の海』

↓

自分の血で贖う最終文学（神話の造形）のため

↳ 文学を超越した本当の文学

2. **人間であることの超越** 文学とはそのためにある。

・先生は人間らしい人間でありたいとだけ。

ミゲール・デ・ウナムーノ 真の騎士道について

「人間以上のものたらんと欲するときだけ、人間は  
本来的な人間となる」

『美しい星』と『朱雀家の滅亡』

→どちらも聖なるものを目指している。

→両者ともに、「憧れ」に向かって命がけであることを謳っている。

### 聖なるもの→神話→人間的な人間

→美しいだけでなく、量があって、重く恐ろしいものでもある。(エドモンド・バーク『崇高と美の観念の起源』)

孤独なる忠義

肉体を乗り越えたところに人間の憧れがある。

「人間の肉体でそこに到達できなくても、どうしてそこへ到達できないはずがあるか」

### 3. 戦後日本が失ったものは何か 戦後レジームが最も嫌うものが行動。

→それを取り戻すのが文学の役目だ。→ 行動

行動 = 矛盾と不合理

真の文学的行動を伴う

↓

これを乗り越えなければ新しい文明に向かえない。

↓

行動の河の一節がここに向かって書かれた。

(行動の河の一節 ↓↓↓)

「しかし、この行動の河には、書物の河の知らぬ涙があり血があり汗がある。言葉を介しない魂の触れ合ひがある。それだけにもつとも危険な河はこの河であり、人々が寄って来ないのも尤もだ。この河は農耕のため

の灌漑のやさしさも持たない。富も平和ももたらさない。安息も与へない。」

矛盾と不合理という宇宙の暗黒の力と一体化し突破することによって真の人間となる。

↓

ここに新しい文学が生まれる。

→ 神話の誕生

(神話とは、矛盾と不合理を呑み込んで

だ先にある真の歴史の恩寵である)

(これ以外にヒューマニズムを打ち砕く力はない)

#### 4. 我々は真の霊性文明へ向かわなければならぬ

霊性文明とは、人間の精神がすべての物質を完全に制御する文明。

- ・この新しい霊性の推進のために新しい神話が必要になる。

→ 行動から生まれる最終文学

↳ 現代人に与えられた新しい神話

三島先生は「自分の文学は、五十年から百年先に向かって真に理解されていくだろう」

↓

アンドレ・マルローの予言が成就

「私は三島事件は、何ものかの終わりだったと思う。

しかし、それがなければ始まりも不可能であるような  
 な終わりだった」

↓

「二十一世紀は靈性の時代となるだろう。さもなくば  
 二十一世紀は存在しないであろう」(1960年代)

※カール・グスタフ・ユングも 1950年『アイオーン』

「二十一世紀は、ゴッドではなく靈性の支配する時代となるだろう」

- ・先生は現代は矛盾と不合理を嫌う科学とヒューマニズムによって滅びに向かっていると考えていた。

↓

これを突破するには逆説的な矛盾と不合理の代表である  
 武士道しかない。

↓

その行動の**衝撃波**のみが、今の時代にくさびを打ち込む  
 ことが出来る。それこそが文学の真の姿である。

↓

死後、残された『豊饒の海』の創作ノートの最後に  
 「光明の空へ船出せんとする少年の姿」を本多が窓越しに見ると書か  
 れている。この結論は『豊饒の海』では取り入れられないで終わっ  
 たが、先生の最終文学の行動の原動力と成ったものではないかと私は思っている。  
 まさに、これは先生が新しい靈性文明を夢見る「憧れ」を表わして  
 いるのではないかと思っている。